

2025年度 一般選抜Ⅲ期(3/7) 国語 出題意図

大問一 出題意図（問題一全体）

問題文は、霊長類学の知見に基づき、人間社会における「不在」の許容について論じている。サルの社会では不在が死を意味するのに対し、人間は言葉や記憶によって不在者を共同体内に留め置く能力を持つ。しかし現代のIT社会が即時的な接続を強いることで、再びサルのような不寛容な社会へ退行しつつあるという文明批判的視点を理解する洞察力を問うた。

出題意図（個別問題）

問一：文脈に適した熟語（至難、素性、災厄、精査、閉鎖など）を選択する語彙力を問うた。

問二：空所補充。サルや類人猿の生態（メスやオスの移動パターン）に関する記述を文脈から整理して埋める読解力を問うた。

問三：空所補充。不在が意味する「社会的死」、移動に必要な「お上の許可」、現代の「短絡的な思考」などを文脈に合わせて選択する力を問うた。

問四：記述問題。人間が長期間の不在を受け入れられる理由について、言葉による噂

や物品を通じて不在者の存在を記憶・共有する能力があるためであることを、本文に基づき簡潔に説明する力を問うた。

問五：内容不一致。「サル社会」の特徴として不適切なもの（人間社会の特徴である「関所」などの記述）を識別する力を問うた。

問六：論述の特徴。筆者が主張を展開する際、冒頭の問いに対する答えを明らかにする形で論を進めている構造的特徴を把握する力を問うた。

問七：内容不一致。本文の趣旨（現代社会の不寛容さへの懸念など）と整合しない選択肢を見抜く力を問うた。

大問二 出題意図（問題二全体）

問題文は、水俣病を題材とした石牟礼道子の作品世界を通じ、言語化できない苦しみ（コトバ）と、それを代弁する表現者の役割について論じている。論理的な「言葉」の枠を超えた、魂の叫びや身体的表出としての「コトバ」の深淵に触れ、受難者と記録者の精神的共鳴を読み取る感受性と読解力が求められる。

出題意図（個別問題）

問一：文脈に適した熟語（証左、恨み言、辛うじて（辛辣・残虐等の漢字））を選択す

る語彙力を問うた。

問二：副詞の理解。「まじまじと」「ぼったり」「たちまち」などのオノマトペや副詞を文脈に合わせて選択する感性を問うた。

問三：段落挿入。水俣病の症状や認定の経緯を説明する段落が、文脈上どこに位置すべきか（全体の背景説明として適切な箇所）を判断する構成力を問うた。

問四：理由説明。なぜ言葉が知解を拒むのか、その理由（表面的な意味だけでなく背後にある言葉にならない情動やリズムを感じる必要があるため）を選択する力を問うた。

問五：事例照合。「言葉をコトバへ深化させる（作家）」と「魂の叫びを言葉に刻む（患者）」という二つの作用が、具体的に誰の事例（ゆき、釜鶴松）に対応しているかを分析する力を問うた。

問六：内容不一致。石牟礼が遭遇した「コトバ」に含まれないもの（客観的な調査記録など）を識別する力を問うた。

問七：概念の識別。「言葉（論理・表層）」と「コトバ（魂・深層）」の使い分けを文脈に即して正しく組み合わせる力を問うた。

大問三 出題意図（問題三全体）

四字熟語の正確な構成知識と、文章読解の基礎となる文法的な識別能力を問う問題である。

出題意図（個別問題）

問一：四字熟語（一蓮托生、臥薪嘗胆、付和雷同、捲土重来、泰然自若）の前半に対応する後半の語句を選択し、完成させる知識を問うた。

問二：川端康成の文章を題材に、文中における語句（副詞「いよいよ」、動詞「思う」、名詞「雨足」、接続助詞「ながら」、形容詞「すさまじい」）の品詞を識別する文法力を問うた。